

う え だ ご う い ち い せ き 上田郷 I 遺跡

- 遺跡番号: No.2
- 所在地: 広野町大字上北迫字上田郷
- 時代: 縄文時代(中期～後期)
- 性格: 集落跡
- 遺構: 竪穴建物跡 埋設土器 炉跡 土坑 溝跡
- 遺物: 縄文土器 石器 土製品



① 発掘調査の様子



② 住居跡が重なって見つかった様子

上田郷 I 遺跡は、北迫川の上流にあたる杉内川右岸の段丘上にあります。平成元年（1988）の発掘調査で、縄文時代中期後半から後期前半（約5千年前～約4千3百年前）の竪穴建物跡（住居跡）が20軒以上見つかりました。

住居跡は縄文時代中期後半が主体と考えられ、建て替えをしながら長期間生活をしていたようです。住居内には炉が2つ並んだ複式炉という形の炉が作られていました。

縄文時代中期は、東北各地で住居跡の数が増加する時期です。上田郷地区と西側の二本柵地区には縄文時代の遺跡が多く分布するため、これらの地域全体に広がるような大規模な集落が存在した可能性もあります。山間部の豊かな自然の中で食料を求めながら暮らしていた様子が想像できます。



③ 上田郷 I 遺跡から出土した土器
土器はひろの未来館に展示してあります。



④ 上田郷地区と二本柵地区の遺跡 遺構の番号は2-3頁の番号と同じです。

縄文時代の住居の床には、火を焚いた炉の跡が残されています。縄文時代中期後半から末頃（約5千年前～4千5百年前）の東北地方南部では、複式炉という形の炉が流行します。複式炉は、浅い穴に石を並べたり、脇に土器を埋めていることが多く、何らかの作業をするスペースを持つ例もあり、地域によって少しずつ形が異なります。

複式炉が作られた理由には様々な説がありますが、薪を燃やした灰を土器に集めて、ドングリなどのアク抜きに利用したのではないかとわれています。

縄文時代中期に住居跡が増えるのは、様々な食材を上手に利用することができるようになり、人口が増加したためと考えられています。



⑤ 上田郷 I 遺跡の住居跡(上)と複式炉(下)



⑥ 復元された竪穴建物跡(上)と内部の様子(右)

住居の屋根や柱は残りにくいため、発掘調査では地面を掘った跡しか見つかりません。白河市にあるまほろんでは、復元された竪穴建物跡を見学することができます。



⑥の写真提供: 福島県文化財センター白河館

ひがしまちろく い せ き
東町VI遺跡

- 遺跡番号: No.103
- 所在地: 広野町大字下北迫字東町・東原
- 時代: 弥生時代 奈良時代
- 性格: 集落跡 墓跡
- 遺構: 掘立柱建物跡 竪穴建物跡 土坑 溝跡 ピット 土器棺墓
- 遺物: 弥生土器 土師器 須恵器 石器



遺跡は、北迫川河口の北側の台地上にあたり、東町地区から東側の東原地区にかけて広範囲に分布しています。これまでの発掘調査や試掘調査で、古墳時代の終わり頃から平安時代までの遺構・遺物が多く見つかっています。広い台地の上から周囲を見渡すことができるため、集落に適した場所だったと考えられます。

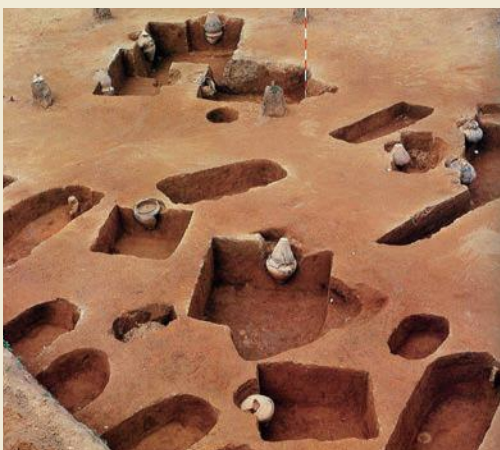
令和5年(2023)の町道の整備にともなう発掘調査では、弥生時代中期末頃(約2千年前)の墓跡も見つかりました。墓跡は、弥生土器の壺を棺に利用し、胴部の中央で横方向に割ってから、穴の中に逆さまにして埋めていました。



① 弥生土器が逆さまに埋められた様子



② 弥生土器の棺(土器棺)



③ 天神原遺跡の弥生時代の墓跡

檜葉町の天神原遺跡では、昭和54年(1979)の天神岬スポーツ公園整備にともなう発掘調査で、土器棺墓24基、土坑墓47基が発見されました。それ以前に見つかったものを合わせると、土器棺墓33基、土坑墓48基になります。

土器棺墓は弥生土器の甕・壺を組み合わせた合蓋土器棺が多く、棺に使用された甕・壺と副葬品の玉類・石鏃は国指定重要文化財、遺跡は福島県指定史跡になっています。

③の写真提供: 檜葉町教育委員会『檜葉町天神原弥生遺蹟の研究Ⅱ』(1982)より



④ 大きな柱穴が並んでいる様子(左)と柱穴(右)



⑤ 奈良時代の集落を調査している様子(左)と出土した土器(右)



東町VI遺跡は、平成27年(2015)に新しく発見された遺跡です。復興工事の際に土器が見つかったことがきっかけでした。その後の試掘調査では、遺跡の北西側の標高が高い場所に大型の掘立柱建物跡があったことがわかりました。時代はよくわかりませんが、柱を立てるために掘った穴の大きさが1m以上あり、かなり重要な建物だったと考えられます。町道の工事でも、奈良時代頃の集落が見つかっており、当時の人々が使っていた土器も多く出土しています。

建物の種類

発掘調査で見つかる建物は、形・地面の掘り方・柱の立て方などで区別されます。

【礎石建物】

土台の石の上に柱を置いた建物
柱が腐りにくい

堂ノ原遺跡(近世)

大きい建物では礎石の下を掘って地面を固める

【掘立柱建物】

地面の穴に柱を直接埋めた建物
柱が腐りやすい

桜田Ⅳ遺跡(奈良時代)

柱の穴は砂や粘土を混ぜた土で埋める

大きい建物では柱が沈まないように板や石を置く

【竪穴建物】

建物全体を掘りくぼめた建物
柱は地面の穴に直接埋める

上田郷Ⅰ遺跡(縄文時代)

建物の範囲を全て掘り下げて柱を建てる

桜田Ⅳ遺跡

- 遺跡番号: No.100
- 所在地: 広野町大字下浅見川字桜田
- 時代: 縄文時代(早期) 奈良・平安時代 中世
- 性格: 集落跡
- 遺構: 竪穴建物跡 掘立柱建物跡 土坑 溝跡
- 遺物: 縄文土器 土師器 須恵器 石器 土製品 羽口



東日本大震災による災害公営住宅整備のための試掘調査で新たに発見された遺跡です。発掘調査では、7世紀末葉から8世紀初頭の竪穴建物が主体の集落や、8世紀前葉から中葉頃の直線的に並んで建てられた掘立柱建物群が見つかりました。

特に、掘立柱建物群は奈良時代の前半にあたり、古代の駅家に関する施設ではないかとして全国的にも話題になりました。

この重要な掘立柱建物跡が集中する範囲については、工事の計画を変更し、そのまま公園の地下に保存されています。



① 上空から見た桜田Ⅳ遺跡



② 竪穴建物跡のカマド周辺から出土した土器



③ 直線的に並んでいる掘立柱建物跡
人が立っているところが建物の柱の位置です。



④ 現在の桜田Ⅳ遺跡の様子

古代の東北と広野町

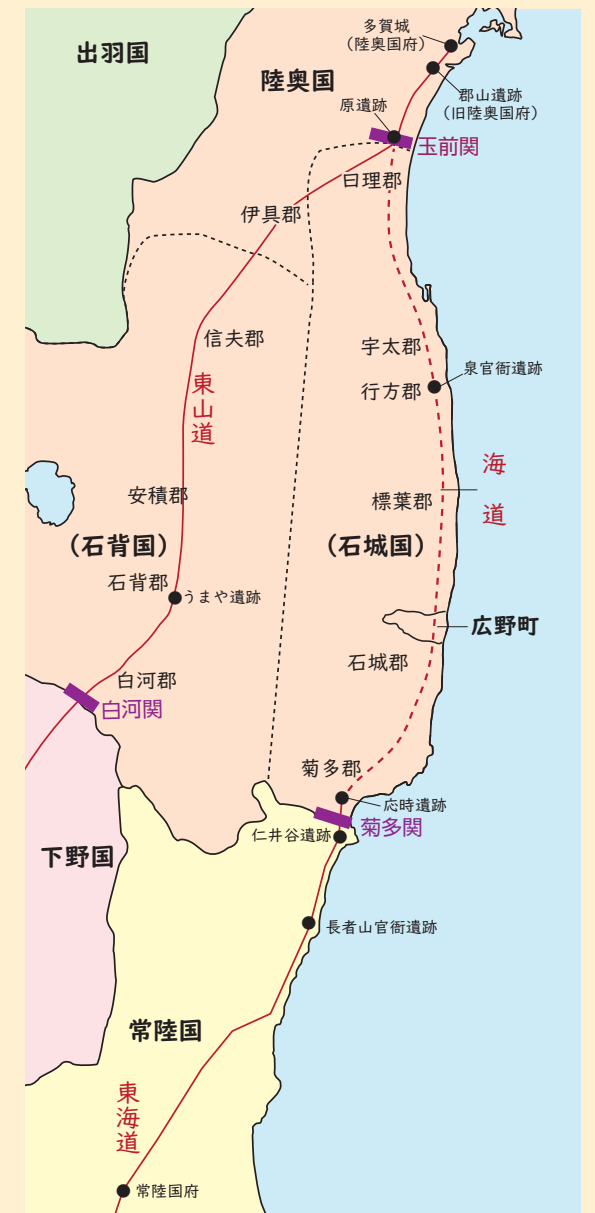
大化元年(645)の大化の改新以降、大和(現在の奈良県)を中心に、地方を国・郡(評)・郷(里)という行政単位に分け、国や郡には役所が置かれました。また、中央と地方を迅速に結ぶための駅路を整備し、駅路には16kmごとに駅家という施設を置きました。

最初は、現在の宮城県南部から福島県にかけては陸奥国という大きな国でしたが、養老2年(718)に陸奥国の南部を分割して石城国と石背国が作られました。石城国は現在の宮城県亘理町から福島県いわき市までの太平洋側の地域にあたり、この時まで常陸国に含まれていたいわき市勿来地区も石城国に入ることになりました。

それまで陸奥国の役所(国府)へは内陸の東山道を通っていましたが、石城国が作られたことで、常陸国から石城国を経由する海道が整備され、駅家が置かれました。石城国は数年で再び陸奥国に戻り、駅家もやがて廃止されましたが、各地で海道の痕跡が見つっています。

海道は浜通りの海岸近くを通ることから、広野町にも駅家があったと考えられています。桜田Ⅳ遺跡で見つかった規則的に並ぶ掘立柱建物跡は、駅家に関する施設ではないかとして全国的に注目されました。一方で、河川を利用して物資を集めるための倉庫群という説もあります。

8世紀中頃の広野町は、陸奥国磐城郡に含まれました。磐城郡の範囲は、いわき市泉町あたりから双葉郡大熊町あたりまでと広く、各地に役所に関する施設がありました。堂ノ原遺跡で見つかった平安時代の掘立柱建物は、役所に関する施設か、在地の有力者の屋敷と考えられています。



⑤ 奈良時代の駅路(推定)



⑥ 8世紀中ごろの陸奥国南部の郡